答えは小さな偶然の中に

人と人がつながり、人と町がつながる
それは、小さな活動の積み重ね
ここには町の未来を考える若者がいる

坂田 純一 さん(27)

平成４年生まれ。小川町仲之江区出身、熊本市在住。小川中一熊本高等専門学校一熊本大学大学院。平成29年より株式会社文化財保存計画協会に勤務。国指定重要文化財江藤家住宅(大津町)にて災害復旧事業の設計監理を行っている。苅萱会と「かるかや市」では事務局を務める。

始まりは小さなコトから

被害を乗り越え、残った町並みを保存しながら地域の再生に取り組む青年がいる。季節ごとにイベント「かるかや市」を開き、毎月町のことを話し合う「苅萱会」を地元有志と行う。

―― 伝統を引き継ぎながら、新しいことを始めたいんです。

坂田純一さんは、この商店街の生まれではない。彼がこの活動を始めたきっかけは、学生時代にこの商店街を研究対象にしたこと。この町に暮らす人々の活動に興味を持ち、町を歩き回り調査をしていた。

ある日、商店街を歩く人の姿が目に入る。眺めていると、ごく自然に店主と会話が始まった。

―― この偶発的な行動…人との出会いって…いいな。

ふとそう思った。

人がいる所に人が集まる。自分がいて、そこに人が集まる。それが広がると…。無限の広がりを感じた。

人との輪を広げて

大学院に進むと、これまで出会った商店街の人たちとグループを作り、空き家や空き店舗を人々の集う場所として活用しようと、空き家がどれくらいあるのか、借りられるのかなどを共に調べ始める。人とのつながりも広がり始めていた。

過去と未来を結ぶ

そんな時に熊本地震が発生。被災した町家を調査する中で、空き家になっていたわが家を解体せずに活用したいと考えていた那須さんと出会う。店舗部分を借り、被災家屋から集めた書籍3千冊で「かんまち文庫」を始めた。人が集まる場所にならないか試し始めるのと同時に、苅萱会にも参加し始めた。町の歴史を大切にしたいとの思いで古くから残る地名から名付けられた苅萱会のメンバーと共に、町の未来を考え始めた。

現在は1万冊を所蔵するかんまち文庫

踏み出した小さな一歩

転機は突然訪れる。平成30年9月に商店街の人たちと、以前は猫さえ歩かないと言われた宮崎県日南市の油津商店街を訪ね、町の再生を学んだ。これを会で報告。会の長老柏原さんが「シャッターを開けよう」とつぶやくと、会は話し合いの場から、一気に能動的なものへと変化。空き地などを活用して手作りの催しを始めることにした。

みんなの想い(おも)をカタチに

―― みんなのやりたいことをカタチにしたい。誰かに任せるのではなく、自分たちの手で次世代にバトンをつなげたい。できることを少しずつ。人との輪を広げながら。

始まりはごく小さなイベントだった「かるかや市」。1年をかけて徐々に人が集まるように。通りに並ぶ町家を尋ねてみると、珍品に出会うこともしばしば。家主と会話をしながらゆっくりと巡ることができる。

1 旧那須商店には古着屋、かんまち文庫などが集まり、ライブも開かれる　**2** 若城さんの骨董品 なんと、使えないアイロンが売れた　**3** 九州最古のビール「サクラビール」の箱　**4** 風の館 塩屋にある旧商家岩崎家の看板　**5** 100年もの時を刻む柱時計　**6** シルクスクリーン体験にご満悦!?　**7** 多くの人々が行き交う

かるかや市の招き犬
太っちょ チビちゃん